

『戦後英国の都市計画理論』

—計画技術論から
総合的まちづくり論へ—

[明石書店刊]

ナイジェル・テイラー 著
佐藤洋平・井原満明・吉川夏樹 訳



本書は、Nigel Taylor: *Urban Planning Theory since 1945* (SAGE, 1998) の翻訳である。本書の翻訳は、筆者が都市地方計画の講義を担当したときに参考図書に取り上げて以来、計画理論を学ぶ上で「読むべき」と強く感じた書であったことに始まる。

著者テイラーは、西イングランド大学で都市計画理論を教えた経験から、学生たちはこの教科が難しいと感じていることを知った。既存の図書には平均的な学生でさえ理解できないような複雑で不明瞭なものが多く、また、都市計画に影響を与えた最近の理論の発展を分かり易く書かれた本がないことを指摘し、こうした状況を補うために、本書は、都市計画概念の近年の発展を、都市計画を学ぶ学生たちにとって、分かり易く書いた、とテイラーは述べている。

本書は、モダニズム、科学主義、システム理論、市民参加、ネオ・マルクス主義、新自由主義、ニューライト、ポストモダニズム、コミュニケーション的行為。ポスト・フォーダイズムなど、第二次大戦以後におけるイデオロギーの主要な発展を紹介しつつ、これらと関連づけながら、過去五十五年間の英国における都市計画思想／理論を説明している。私たちは、たとえば、物的デザインを中心とする伝統的な都市計画の考えから、都市計画が政治活動と連関することを認識するまでの移り変わりを学ぶことができる。あるいは、近年のサツ

チャリズムに代表されるニューライトの政治経済社会的な文脈の中で英国の都市計画がどのように変わったのか、変わらなかったのは何かなども本書から学ぶことができる。さらには、計画家は、近年「計画理論とは何か」という問いを深化・発展させること（大理論化）に取り組むよりは、都市の衰退、社会的不平等、地球規模の生態学的危機、持続可能な発展などといった社会が抱える課題に傾注する、課題本位の都市計画が潮流となっていることも指摘する。

こうした豊かな内容をもつ本書は、四部九章から成る。戦後初期の計画理論を取り上げる第一部では、一章で戦後の都市計画概念を構成する要素を詳述し、戦後初期の都市計画が物的計画とデザインを本位とする計画であったことを描き出している。二章でこうした計画の根底をなす規範的理論に言及し、ユートピア的包括性、反都市耽美主義、都市構造の整序観などに言及する。三章では、前二つの章で述べられた戦後計画理論に対する批判について論じる。一九六〇年代の計画理論を概観する第二部では、四章で、一九六〇年代に期せずしてほぼ同時期に提唱された計画のシステム観と合理的プロセス観について概説し、五章では、計画のプロセスと政治活動との連関を論じ、市民参加について論及する。一九七〇年代から一九九〇年代までの計画理論を取り上げる第三部では、計画の効果に関する理論を六章で、合理

的計画と実施理論との関係を七章で論じ、コミュニケーション的行為としての計画に言及する。サッチャリズムに代表されるニューライト以降の計画理論を取り上げる八章では、サッチャリズム

の下での都市計画の変容、都市計画におけるレジーム論およびレギュレーション論の考察、計画課題を主とする計画理論への変化を述べ、近年提唱されるようになった「コミュニティ」主体計画にも論が及ぶ。本書の結論を述べる第IV部では、九章で戦後計画思想におけるプライムシフトを議論した後に、計画理論の根底にある価値観を揺るがすポストモダニズムについて論考し、まとめとして、専門分野としての都市計画と都市計画理論を総括して本書を終えている。なお本書は、英国の大学で都市計画理論を学ぶ学生を対象に書かれているので、彼らにとっては自明なことも多いので、読者には必ずしも自明でないことも多いので、本書では詳細な訳注を施し、読者の理解を助けるよう努めた。

英国の詩人ウィリアム・クーパーが *The Task* 『仕事』の中で「神が田舎を造り、人間が町を造った」と詠い、ワーズワースに代表される牧歌的な詩が自然と人間が織り成す田園を讃える。こうした社会的文脈のなかで、たとえば、ユートピア主義、反都市耽美主義など保守的傾向の強い初期の都市計画が、いかなる批判を受け、どのような理論的変容をみたかを本書は述べる。時代時代の政

治経済社会的文脈にも目を配りながら展開される計画理論の本書は、計画理論の研究に広角的俯瞰的視座を与えてくれる。

本書が述べる計画理論は、産業革命に伴う都市の劣化する衛生環境を改善することから都市計画が生まれ、都市・田園計画法として制度化されたイギリスの計画体系のもとでの理論に焦点を当てている。都市計画制度の彼我の違いはあるが、日本の都市計画が英国の都市計画の開発許可制度とアメリカ都市計画のゾーニング制度の両方を持つ体系となつている。参照された英国の都市計画体系のもとでの計画理論を理解することは、日本の都市計画の理解を深め、異なる視点からの計画理論に関する日本の研究に示唆を与えるであろう。

英国の都市計画については、渡辺俊一が都市・田園計画法制度のもとでの都市計画の実態に関する詳細な実証研究に基づく優れた成書『比較都市計画序説—イギリス・アメリカの土地利用規制—』がある。しかし、計画理論に関する良書については、寡聞にして知らない。本訳書が、都市計画や農村計画など地域計画に関わる学生、大学院生、研究者、教師、実務者などの参考になるばかりでなく、計画理論の研究が深まり良書が生まれる契機となるならば、訳者の望外の喜びである。

(佐藤洋平 記)

PROFILE

ナイジェル・テイラー (Nigel Taylor)

ブリストル工科大学、1992年からは西イングランド大学計画・建築学科で都市計画理論、都市計画思想、都市デザイン、建築の美学などを教える。2010年退職。

佐藤 洋平 (さとう ようへい) [訳者代表]

農学博士、東京大学名誉教授、国際農業バイオシステム工学アカデミー (IAABE) フェロー。専門は地域環境工学。日本学術会議会員、農村計画学会会長、農業土木学会会長、国際水田・水環境工学会 (PAWEES) 会長、食料・農業・農村政策審議会委員などを歴任。国際農業工学会 (CIGR) 功績賞 (2000年)、農業土木学会学術賞 (2004年)、国際農業バイオシステム工学会メリット賞 (2006年)、PAWEES国際学術賞 (2007年)、日本環境共生学会環境共生功労賞 (2020年) など受賞。

井原 満明 (いはら みつあき)

まちづくりプランナー、1985年に(株)地域計画研究所を設立。全国のまちづくり支援など各種計画の作成に関わる。東京学芸大学、東洋大学などの非常勤講師など歴任。総務省地域力創造アドバイザー、内閣府地域活性化伝道師。

吉川 夏樹 (よしかわ なつき)

農学博士、新潟大学教授。ロンドン大学SOAS修士課程修了後、NPO法人勤務、青年海外協力隊などに従事。専門は農業土木学、農業水文学。農業農村工学会研究奨励賞 (2010年)、PAWEES最優秀論文賞 (2015年) を受賞。

◎「戦後英国の都市計画理論」を一〇名様にプレゼント致します。ご希望の方は、「戦後英国の都市計画理論」希望として、官製はがきまたはメールにて82ページの宛先まで住所、氏名、性別、年齢、職業、勤務先を記入し申し込んで下さい。